

四月のテーマ

喜ばせる生活



え・城谷俊也

妻を喜ばす 夫となること

S氏は大阪で建築工事業を営んでいます。会社での新規

事業立ち上げと、倫理法人会で役職を受けたことが重なり、忙しい日々を過ごしていました。

家庭のことはおざなりで、帰宅する時間もわからないような毎日でしたが、妻から文句を言われることはありませんでした。

そんな折、妻の癌が発覚したのです。入院した妻に手術を勧めると、「私はもう死ぬ。手術もしない。これで死んでも、この世の中に未練も何もない」と拒否し、口を閉ざしてしまつたのです。

もともと妻は看護師として働いていました。人と関わるのが好きだったのが、結婚生活の中で内に閉じこもるようになり、会話もなくなっていたのです。

「手術はしない」という言葉を聞き、S氏はこれまで妻の話も聴かず、口出しだけは多かつた自分を反省しました。妻への申し訳なさと自分への不甲斐なさを実感しつつ、「妻が前向きになれることはないだろうか」と考え、妻を初め

てモーニングセミナー(MS)に誘つたのです。会場でも妻は落ち込んだままでしたが、その後も声をかけると一緒についてきました。三カ月が経過した頃、妻は手術を受けました。手術が成功した後、妻が突然「MSに毎日参加したい」と言うのです。S氏は驚きましたが、妻を連れて、毎日異なる地域で行なわれているMSを回るようになりました。

一緒に行動する時間が増え、妻の話に耳を傾けるようになると、S氏は、妻が自分に気を遣いながら会話をしていたことに気づいたのです。「どれだけ寂しい思いをさせてきただろう……。今は夫婦で一緒にいることを嬉しく思つてくれているのかもしれない」

薄皮をはぐように明るさを取り戻していった妻に、S氏は思いやりを持って接しました。三度の食事と共にするようになりました。

夫婦仲が改善するにつれ、数年前に退社し、引きこもっていた長男が会社に復帰するという喜びがありました。社内全体にも前より

笑顔が増え、互いの信頼感も深まっています。当時を振り返りながらS氏は「夫婦仲が子供や会社、すべてにつながっていると実感しています」と語っています。

*

丸山敏雄は「夫の倫理」として掲げた心構えの一つに、「妻を喜ばす夫となること」を挙げました。

入浴、衣服、食事。ただ朗らかに、うれしく、妻の心がこもつたものを喜んで頂戴する。「お先に休ませていただくよ」——なんと明るい一家であろう。遠く外出し、出張したときは、子供よりも妻に（老人がおれば、まずは、老人が第一）みやげを忘れぬこと。妻は、物を喜ぶのではなく、夫の心を喜ぶのである。『丸山敏雄全集』より

夫婦は一对の反射鏡です。妻の喜びは、自分の喜びとして返ってきます。その喜びは社員に伝わり、取引先との関係や製品の出来栄えにもつながっていくものです。

家庭と事業は別物だと考えがちですが、S氏のように、夫婦関係が事業の充実に関わっていることを多くの体験が物語っています。